

児童健全育成賞・奨励賞

「駄菓子屋さんごっこ」で培いたい子どもの主体性 —ごっこ遊びを通じて体験するお金の管理と商品購入の仕方—

神奈川県海老名

非特定営利活動法人 WISDOM 放課後児童支援員 久保田 直 泰

1. はじめに

さくらんぼきっずは神奈川県中央区域にある海老名駅から徒歩15分ほどの所に位置している放課後児童クラブ（以後学童）である。さくらんぼきっずは、2018年3月に開所し、職員はパートを含め8名の中、常時3人～4人体制で運営している。コロナ期間では、様々な製作や遠足などの行事を中止せざるを得なかったが、令和5年からはすべて復活。特に夏休み最終日の「駄菓子屋さんごっこ」は子どもたちから大人気で、「駄菓子屋さん」の商品選択・購入、販売のためのディスプレイ、実際の販売・購入など職員と子どもが一緒になって作り上げていく行事である。

さくらんぼきっず開所当時は、1年生から3年生まで20名弱の登録数で、毎日の登所人数は15名前後であったが、現在の登録数は1年生から6年生合わせて64名。毎日35名前後が登所している。開所当時1年生だった子どもたちが、現在では6年生になり、普段の生活の中で職員さながら下級生に声かけを行ったり、行事等、特に駄菓子屋さんごっこでは全体をまとめ、とても頼りになる存在だ。さくらんぼきっずにおいて、6年生が「頼りになる存在」と言うのは毎年繰り返されていることである。今までにさくらんぼきっずを卒業していった子どもたちも、最上級生だった時は、とても頼りになる存在であり、どの子どもたちも下級生のことを気かけ、行事の際には現在の6年生たち同様に全体をまとめてくれていたので

ある。下級生はまとめてくれていた上級生の姿を見て学び、直に感じることで、年齢を重ねるごとに自然と下級生のことを気にかけてくれるようになり、次第とさくらんぼきっずをまとめてくれる存在になっている。このように成長していくのは、学童が異年齢集団であり、生活の場であることが大きく影響していること、さくらんぼきっずでは下級生と上級生の関係がしっかりと築かれているからであると考えられる。では次に、子どもたちはどのようにして、関係が築かれていくのかについて述べていく。

2. 日々の生活で築かれる関係

年度が替わる4月、毎年10名近くの新1年生がさくらんぼきっずに入所している。さくらんぼきっずを卒業する6年生や利用登録を解除する子どもがいる3月や家庭の事情で途中入所してくる子どもがいる月もあるが、さくらんぼきっずでは、1年を通して1番顔ぶれが替わるのが4月である。年間を通して4月の学童開所日初日はさくらんぼきっずに登所する子どもの数が多く、この日は子どもはもちろん、指導員も含めて全体で自己紹介を行う。自己紹介を行うことで新1年生に「学童に受け入れてもらえた」と感じてもらうことと、2年生以上に「1つ学年が上がった」ということを感じてもらうことが狙いである。

毎年4月中旬までは、新1年生（以下1年生）の身の回りのことを日替わりで2年生以上（主に2年生）に任せている。主に2年生に任せ

ていることには理由があり、2年生の子どもたちに「私たち（僕たち）はお兄さん、お姉さんになったんだ」と自覚を持ってもらう狙いがある。しかし、2年生の中には、急にお兄さん・お姉さんになることが難しい子どももいる。これは、3月までは2年生が1年生だったので、当然に想うことである。それでも同い年の子どもが変化の様子を見て、少しずつではあるが変化が見られる。列に並ぶ際は2年生が1年生と手をつないでくれたり、時間の声掛けやお当番作業の手助けなど普段の生活の中はもちろん、遊びの中でもルールを教えたり、遊びに誘う、誘われることにより、2年生になった子どもたちは「私たちはお兄さん・お姉さんになったから面倒を見てあげよう」と1年生と積極的に関わりを持とうとしてくれるようになる。これを毎年繰り返しているのからこそ、1年生と2年生との間に関係が構築されていき、さらには、生活や遊びの中で3年生以上も1年生に関わるので、下級生から上級生との間にも関係が築かれていくのである。

関係が築かれていく背景には、学校の長期休みや振替休日にも学童が開所し、利用している子どもが存在していることが関係していると考えられる。『子どもの発達と学童保育』（福村出版 田丸敏高他）において田丸他が「年間500時間も学校より長い時間を学童保育で過ごしているのです。¹⁾」と述べているように、学校よりも学童で過ごす時間の方が長い子どももいるのだ。

学校よりも長い時間を過ごす機会がある学童での日々の生活の中で少しずつ関係が築かれていくが、より一層関係が築かれていくのが夏休みである。夏休み期間、家族と過ごす時間よりも学童に登所する子どもたちや職員と過ごす時間の方が長い子どもも少なくないからである。そのため、子ども同士、子どもと職員間での関係がより一層築かれるのである。また、今まで関わりがなかった子どもと過ごす時間も多くなることもあり、新たに関係が築かれていくこともある。

夏休み中に関係が深まることについて、夏休み中の生活以外にも、この時期に遠足があること、また、子どもと職員で作る「駄菓子屋さんごっこ」があることが大きく影響していると考えられる。

3. 駄菓子屋さんごっこの起源

さくらんぼきつずで駄菓子屋さんごっこが行われ始めたのは、2021年8月からである。当時のコロナ禍の影響で、さくらんぼきつずでの生活は変化を余儀なくされ、例年行われていた遠足などの行事がすべてなくなった。しかし、お腹が空いた子どもがおやつを食べたいときに食べられるようにしようと、コロナ禍でもさくらんぼきつずではおやつの時間を無くさず、パーティーや消毒等による感染防止を徹底し、職員と子どもが協力し合い、おやつの時間を無くすことなく生活してきたのだ。学童でのおやつに関しては、『子どもの発達と学童保育』（福村出版 田丸敏高他）田丸他は、次のように述べている。学童保育から家に帰って、おやつの話ばかりする1年生がいます。おやつというのは、それくらい意味があるのです。²⁾

以上で述べられているように、学童でのおやつには、子どもにとって大きな役割があると考えられる。

おやつの時間は子どもにとって大きな役割を持つ。そのおやつの時間を用いて、コロナ禍でも子どもたちが楽しめるイベントはないかと職員間で話し合い、考え、決まったのが「駄菓子屋さんごっこ」である。そこから毎年の夏休みの平日最終日に駄菓子屋さんごっこが行われている。初めは「なにか楽しめるイベントをしよう」の理由であったが、近年では駄菓子屋さんごっこに3つの狙いを掲げている。まず、「お金を用いての買い物を体験してもらう」ことだ。

さくらんぼきつずを利用する保護者の中には、フルタイムで仕事をされている方もおり、家庭の食材の買い出しなどを宅配や子どものお迎え前、仕事帰りに済ませることが少なくない。そのため、子どもが親との買い物に付き添

う機会が少なくなっている」と私は考えている。また、近年のタッチやカード決済の普及により、保護者自身も現金で買い物をすることが少なくなっていると考えられ、子どもがお金を使つての買い物を体験できるように考えた。これに関しては後程、事例を紹介しながら買い物体験の重要性を説明したい。

次に「物を販売する経験をしてもらうこと」である。物を販売するという事は、お金をもらい、商品を渡すだけではなく、言葉遣いなどの接客の仕方、商品のディスプレイの工夫など様々なことを考えることが必要であることを子ども同士、あるいは子どもと職員で話し合い、どうすれば売れるかということを考え、実践してもらいたい狙いがある。

最後に「今まで接したことがない子ども同士が接する機会を作るため」である。日々の生活や遊びの中である程度の関係は築かれているが、曜日固定で利用している子どもは、その曜日以外に来る子どもと関わりを持つ機会が少ない。しかし、夏休みであれば学校がない分、普段の利用していない曜日でも利用することとなるので、他の子どもと会う機会が多くなる。そのため、夏休みに駄菓子屋さんごっこを行うことでより一層関係を築き、仲間意識を持ってもらうことが狙いにある。そして、築いた関係をもとに、2学期からも仲間のいる学校に行き、学童に行こうと子どもたちに思ってもらいたいという狙いがあるのだ。

4. 子どもたちの買い物に対する背景

先ほど述べた「お金での買い物体験」に関して、学童に通う子どもたちは、親が現金を用いての買い物に子どもが付き添うことが年々少なくなっている」と私は考える。また、買い物をするという事は生活していくのに必要不可欠である。

事例1 保護者がフルタイムで仕事をしている Aさん

(事例当時1年生)

Aさんの保護者は共働きで、共にフルタイム

で仕事をされており、在宅勤務もあれば職場に行くこともあるそうだ。保護者の方が在宅勤務の日、Aさんは17時に一人で学童から帰るのだが、保護者が在宅勤務ではない日は、保護者のお迎え時間が19時を過ぎる日もある。

Aさんのお迎えは、お母さんのことがほとんどで、Aさんが言うには「お父さんは私が寝ている時に帰ってくることが多いんだよ」と話していた。また、お母さんがお迎えの際は、仕事帰りに買って来たと思われる袋を持っていることが多く、職員との会話でもAさんは「お母さんやお父さんとお買い物に行ったこと…あんまりないかな」と話していた。

事例2 お土産で何をどう買えばいいかわからないBさん (事例当時3年生)

さくらんぼきつぷでは、1月に1泊2日のスキー体験を実施している。参加者は3年生以上の希望者と数人の職員である。スキー体験で宿泊しているホテルにお土産屋があるので、2000円までのお小遣いを持参し、お土産や今すぐ飲みたいジュースなど、好きな物を買うことができる。お土産を買う際は、お土産の計算や何を買えばいいか悩んでいる子どものフォローのため、職員もお土産屋内に1人はいるようにしている。中には、家庭の方針から、お小遣いを持参しない子どももいるが、ほとんどがお小遣いを持参している。

Bさんは一人っ子で普段、物静かであるが、近くに友だちがいる時や楽しいと思えることが起こると活発的になる子である。Bさんは3年生の時にスキー体験に参加した。

職員がお土産屋で物を眺めるBさんを発見し、「買いたいと思うものを選んでみてね。何かわからなかったら声をかけてね、また様子を見て来るよ」と伝え、20分近く様子を見ていたのだが、Bさんは一向に商品を手に取ることはない。近くにいたBさんの友だちは「これと…あれを買いたいけど、お金がギリギリかな」と買いたい商品の金額を計算し始めていた。職

員がBに「無理に買わなくてもいいし、部屋で食べたいおやつやジュースを買ってもいいけど…何かあったかな？」とBさんに声をかけるとBさんは「わからない」とつぶやいた。何がわからないか聞いてみると「どうやったら買えるかわからない」と教えてくれた。

購入の仕方は数日にわけ、お土産屋に行く前にも「買いたいものはレジに持って行って、お金を払って買うんだよ」と説明していたが、Bさんは「あまり見たことがないからわからない」と普通の保護者との様子を教えてくれた。職員が「じゃあ、今一緒に見てみよう」と職員が購入したいと思ったジュースをレジに持っていく、店員さんに商品を渡すこと、お金の受け渡しを行う等の店員さんとのやりとりを見せた。するとBさんは「何となくわかった」と言い、Bさんが買いたいと思ったジュースとお菓子をレジに持っていく、購入することができ、Bさんも満足気な表情をしていた。

事例3 所持金と欲しいものの金額が合わない 4年生のCさん

(事例2と同じようにスキー体験のお土産屋での事例)

Cさんは4年生になって初めてスキー体験に参加した。Cさんは一人っ子で、普段は算数の計算等も問題なく解き、友だちもそれなりにおり、1人でも数人でも行動できる子どもだ。

スキー体験に参加したCさんはお土産屋に行くと「うわあ～…すごい！」と目を輝かせて商品を物色し始めた。しばらくCさんの様子を見ていると買い物かごにたくさんの商品を入れているCさんの姿があった。近くにいたCさんの友だちが「そんなに買えないと思うよ」とCさんに伝えている様子を見て、職員も「Cさん、そんなに買って大丈夫？持ってきたお金じゃ買えないんじゃない？」と話しかけると「大丈夫！欲しいものは買いたいんだ！」と教えてくれたが、明らかに買いきれないほどの商品を入れていた。「買わない物はあまり触らないようにして、本当に買いたいと思ったものを入れ

るんだよ」と購入前で説明したことをCさんに再度伝えても「うん！大丈夫！足りると思うよ！」の一点張りだ。「お小遣いを多く持参してきたのでは？」と疑問に思った職員が、お財布の中を見せてもらったが、金額は事前に伝えていた2000円だった。

店員さんには事前に「もしかしたら計算できていない子どもがレジに行ってしまう迷惑をかけるかもしれません」と協力を得ていたが、Cさんは欲しいものをたくさん入れたレジに行き、合計金額を出してもらったのだが、所持金の倍以上の金額だった。店員さんから職員からも「持ってるお金じゃ足りないから全部は買えないんだよ」と言われると、Cさんは欲しい物がすべて買えないことに泣いてしまった。その後、一度レジを離れ、しばらくしてから落ち着いたCさんに「欲しい物を買うときは、自分が持っているお金の分だけしか買えないんだ。だから何かをやめないといけないんだよ」と伝え、Cさんは「だって欲しい物が多すぎて減らすことができないんだ」と教えてくれた。その後、Cさんと職員、近くにいた子どもも交えて10分近く考え、買いたいものを厳選し、無事にCさんは欲しい物を購入することができた。

私は、3年生以上ともなれば、少なくとも保護者が商品を購入する姿を見たことがあり、なんとなく購入の流れが把握できている。もしくは、保護者とお買い物の際に、商品をレジに持っていくことや店員さんにお金を渡すなどのお手伝いをしたことがあるものだと考えていた。しかし、Bさんの「どうすればお買い物できるかわからない」ということやCさんの「購入したい物の合計金額を考えられなかったこと」を目の当たりにし、駄菓子屋さんごっこを通じて、お金を用いての買い物を体験してもらうことで、買い物をする際のイメージがつきやすくなればという狙いがある。

5. 駄菓子屋さんごっこの準備

駄菓子屋さんごっこに向けての準備は大きく

「駄菓子屋さんごっこ」で培いたい子どもの主体性

3つある。まず、夏休みに入っただけに「食べてみたい・食べたい」商品のピックアップを行うことだ。商品紹介は職員も行うのだが、子どもたちが自らタブレットで検索し選んでいくこともある。また、希望商品を記載することができるアンケートボードも設置。このアンケートボードは、子どもと職員はもちろん、お迎えに来られた保護者の方にも見える位置に置き、誰もが書くことができるようにしておく。それにより、職員と保護者間での関係を築くことはもちろん、駄菓子を知っている保護者の方々が子どもに教えることにより、親子での会話にもつながっている。中には、恥ずかしくて自分で書くことができない子どももいる。その際には職員がそっとフォローを行い、後日職員が書く。子どもたちは「自分の意見をみんなが見てくれて認めてくれている」という自信につながり、他の作業にも心を砕いていくのである。こうして決まった商品は職員が購入する。購入する際に気をつけなければいけないこともある。それは、アレルギー反応が出てしまうかもしれない駄菓子の購入を避けることである。さくらんぼきつずを利用する子どもの中にはアレルギーを持っている子どもも少なくはない。日々出しているおやつのお購入から気をつけているアレルギーに関しても細心の注意を払わなければいけないのだ。また、購入する際の予算は、子どもたちに配布するお金の300円と当日の利用予定人数を考え、予算を組んでいる。

このように購入した商品は、仕入れ値を参考にし、当日の販売値を職員が決めていく。販売価格を十の位で切り上げたいので、販売値を決めるのに悩んだ際には、6年生にも話を聞き、値段を決めることもある。

商品のピックアップと並行して子ども中心で「お金」の準備を始める。「駄菓子屋さんごっこ」専用の「お金」は2×5cmの大きさに10円・50円・100円と色画用紙を使って金種別に作っていく。初めは高学年にお願いするのだが、高学年が作る様子を見て「私も作りたい」と低学年もお手伝いを始めてくれるのである。

お金の準備をしながら、高学年が低学年にお金の計算も教える姿も見られる。

そして、商品を陳列する棚やケースの準備は5・6年生が進めていく。ケースはお菓子の空き箱や折り紙、マッキーなどを利用し、子どもたちが考え、飾りつけを行う。話し合いの中で箱の形や深さを考慮しつつ、実際に商品を合わせ、当日店員になったときのイメージをし、どのようにディスプレイすると「購入意欲」が高まるのか一生懸命に考え、アイデアを出していくのである。職員は子どもたちからのアイデアを引き出したり、整理したりしながら、その年独自の駄菓子屋さん開店へ向け助言等を行う。

駄菓子屋さんごっこの準備を職員ではなく、子どもメインで行うことにより、子どもたちが「この駄菓子が食べてみたい」や「どうすれば商品の見栄えが良くなるか」など一人一人が主体的に考えられる機会を増やすとともに、集団で何かを成し遂げる経験をしてほしいのだ。

しかし、子どもたちの中には、自らで考えたことを他者に発信することや誰かとかかわることを苦手とする子どももいる。その子どもたちに、どのように声かけ等を行うかが職員の課題である。この課題解決には、普段からの声かけ等による職員と子ども、子ども同士での関係を築いていくことが必要不可欠であると考えられる。

6. 駄菓子屋さんごっこ開店へ

当日の駄菓子屋さんごっこはさくらんぼきつず施設内で14時から行うが、上級生は商品の陳列、会計の準備などで朝から準備に追われる。

上級生が一段落したタイミングで、子ども全員と職員に「お金」を配布する。配布するお金の金額は1人300円ほどで、配布した後に、子どもたちに「お金」の保管の仕方や使い方など「自分のお金の管理」について職員から説明を行う。以前にも駄菓子屋さんごっこを経験した子どもたちの中には、折り紙やお菓子の空き箱等で「お財布」を作り始める。駄菓子屋さんごっこを経験したことがない1年生も他学年の子どもたちがお財布を作る姿を見て、「いい

な～、私も作りたいな」と作り始めるが中には作り方がわからない子どももいる。すると、「わからないことある？」と中学年を中心にお財布作り講座が始まり、駄菓子屋さんごっこ前に盛り上がりを見せるのだ。

しかし、お財布を作ったけれどもお金をなくさないか不安な子どもたちもいる。その子どもたち向けに「さくらんぼ銀行」を設けておく。これは職員が管理する銀行で、従来の現行同様に手渡しでお金を預ける・引き出すことを行うことができる。設けておくことにより、子どもたちの「自分のお金だから自分で管理してみたい」や「私は物を無くすことが多いから預けておこうかな」と主体的な考えを尊重できるのだ。

昼食を食べ終え、職員と上級生でテーブル等の移動を行い、商品の陳列を行っていき、どんな駄菓子が売られているか確認するための下見タイムを設ける。駄菓子を見た子どもたちの反応は、「あの駄菓子美味しそ～う」、「あの駄菓子は100円なのか…」、「私の好きなやつあった!」、「まずはあれを買って、次にはあれを…」など様々である。

店番は高学年が順番で行い、3・4年生には近くの1・2年生の購入の手助けを行ってもらう。開始時刻になり、職員の駄菓子屋さんごっこ開始の挨拶を行い、購入する順番を決めていく。順番はサイコロを振り、出た目の数の学年から順に購入をしていく。以前の決め方は、サイコロではなく、くじ引きができるアプリを職員が使用し、順番を決めていたが、子どもだけでも行うことができる方が良いのではということで、2回目の駄菓子屋さんごっこからサイコロを使用し始めた。サイコロを振るのは上級生に任せている。購入時はルールがあり、商品は一度に1品しか購入できないというものだ。これはまとめ買い等を防ぐためである。全学年が1品ずつ購入すると職員も購入機会が訪れる。職員が購入した後、サイコロの振り直しを行い、再度順番を決め、購入していく。これを数回繰り返し、子どもたちの支持金がなくなるまで行う。子どもたちには「使わなかったお金

や余ったお金は、最後先生が集めちゃうから、工夫して、ほしいと思った物は買ってね」と伝えると子どもたちは「じゃあ、10円の商品は最後に購入しようかな」など購入の順番を考え始めるのだ。

購入していない学年の子どもたちは、普段おやつを食べる時と同じようにテーブルがある場所に座り、自分たちの購入順が来るのを待つ。待っている際に子どもたちは「何を買おうかな～」、「夏休みの宿題終わった?」等それぞれで会話が見られるテーブルもある。また、購入した駄菓子は食べることができ、「この駄菓子美味しい!」、「ほら見て!舌が青色になった!」、「いいな～、次はその駄菓子買ってみたいよ!」、「残っているお金は50円だから…よし、あれを買おう」と子どもたちは駄菓子を食べながら次の購入へと胸を躍らせていく。

このようにほとんどの子どもたちは購入順番が来るまで購入した駄菓子を食べ待っているのだが、昼食後ということもあり、「まだお腹空いていない」と駄菓子を食べないで購入だけ行う子どももいる。しかし、そういう子どもたちも周りが美味しそうに食べている姿を見て食べ始めるのだ。

購入した駄菓子を食べきれない子どもや、お家で家族とも一緒に駄菓子を食べたいと言う子ども、また、アレルギーを持っていて「この駄菓子が食べられるか心配」という子どももいるので、未開封であれば、購入した駄菓子の持ち帰りも可能としている。持ち帰りを選んだ子どもがいる際、お迎えに来た保護者には直接伝え、お迎えに来られない保護者には、「駄菓子を持ち帰りましたので、ご確認のほどよろしくお願いいたします」とそれぞれ連絡を行う。

駄菓子屋さんごっこを終えると子どもたちは「楽しかった!」、「またやりたい!」、「買いたいのを買えなかった」と感想を出してくれるが、どの子どもにも笑顔が見られるので、職員の達成感にもつながると感じている。

7. 駄菓子屋さんごっこを通じて

この駄菓子屋さんごっこを経て、子どもたちの様子にいくつか変化が見られる。変化の中で私が特に感じたのは、下級生が上級生と関わりを持つ機会が増えたことだ。1年生のやまとくん(仮名)が、これまであまり関わりがなかった6年生のたけしくん(仮名)に「たけしお兄さ〜ん」と声をかけ始めたのだ。たけしくんもやまとくんへ声をかけられるのが嬉しいようで、「おっ、やまとくん。一緒にレゴでもするか?」と一緒に遊ぶ姿も見られるようになった。他にも下級生が高学年に「おかえり〜」と声をかけ、「ただいま!」と言葉を返す姿も見られるようになり、関係が深まったと考えられる。

学童保育は4月から新1年生を迎えて新しくスタートするが、卒業していった代々の6年生たちが一つ一つ歴史を重ねて学童の社会を作っていき、そこに新1年生や途中入所のお子さんが加わり、さらに仲間意識の強い集団がつくられていくのだ。

企画・運営するだけではない「駄菓子屋さんごっこ」。子どもたちが主体的に準備を行えることにより、上級生が下級生を思いやる心、お互いに助け合う心。駄菓子という商品選びを通して「自分の気持ち」を表現することや、自分で商品を選ぶという自分主体の行動、「物を売る」ということ、「お金」を使うということを学べるからである。このようなことから、私は駄菓子屋さんごっこのような行事が大切であると考え。

職員が駄菓子屋さんごっこの準備を率先して行うことで、準備を早く終えることができるかもしれないが、職員が率先して準備をするのではなく、子どもたちが主体的に準備を行える環境を作ることが大切であると考え。駄菓子屋さんごっこの根本がごっこ遊びだからである。『子どもと遊び』(誠文堂新光社久保田浩)において、久保田はごっこ遊びに関して、私たちは子どもたちのこのイメージの世界をのぞきみていかなければなりません。それに共感し、理解し、さらにその世界のなかにもぐりこんでいく

姿勢をもっていなければ、子どもにとってじまな存在でしかないのです。³⁾と述べているように、職員は率先して準備を行うのではなく、子どもが主体的に発言や行動ができるように環境を作ることが大切であると私は考える。

また、保護者との会話からも子どもの変化がみられた。Dさん家族が遊びに行った際、Dさんが自らのお小遣いで欲しい物を買ってこれたという。Dさんの保護者は「今まで子ども1人で買い物なんてしたことがなかったんですけど、Dが『自分で買ってみたい!さくらんぼきつずの駄菓子屋さんでお買い物できたんだよ!』と教えてくれたので、任せたらお買い物することができていました。ありがとうございます。」と職員に教えてくれたのだ。駄菓子屋さんごっこでの買い物体験が、家庭での生活に活きていると考えられる。

8. 地域との関わりを目指して

現在はさくらんぼきつずの行事として、施設内で行われている駄菓子屋さんごっこだが、今後は「自分たちとは違う世界」の地域との関わりの中で「駄菓子屋さんごっこ」を展開していきたいと考えている。地域との交流を行うことで、子どもたちの世界観を広げることができる。ただ、これには「子どもたちの安全性の確保」という課題があり、不特定多数の外部の方との接触の中、「安全性の確保」をどうしていくのか、まだまだ考える要素が多々ある。今後「地域との連携」への道を探っていくのが、さくらんぼきつずにおける駄菓子屋さんごっこの課題である。

最後に、文中における子ども、保護者、職員の発言、事例等はプライバシーの保護の観点から外部に漏れないよう十分に配慮いたしました。

参考文献

- 1) 田丸敏高他(2011/10)『子どもの発達と学童保育 子どもの理解・遊び・気になる子』(福村出版株式会社) p.195-196

- 2) 田丸敏高他 (2011/10) 『子どもの発達と学童保育
子どもの理解・遊び・気になる子』(福村出版株式
会社) p.45-46
- 3) 久保田浩 (1984/8) 『子どもと遊び 遊び研究入門』
(誠文堂新光社) p.135-137